

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書			2025/9/25		
団体名		NPO法人びーのびーの	活動タイトル	「シェアねっと」活動から派生した地域寄り場の会での寄るよるコミュニティ家族	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）				■ 活動風景	
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)		子ども支援・子育て支援に手も目も力も貸したいという地域の人たちに囲まれ、「子ども1人を育てるには村中のひとが必要（アフリカの諺）」のような社会をあらためて取り戻すこと。 また当法人の中期計画（2022～2024年度）で打ち立てたビジョンには「子育てを誇りに、私を誇りに」が掲げられ、「子育てをする人のみならず、支える人、見守る人、誰でもが誇りに思える社会」を目指すとしている。この助成プログラムを通じて活動場所が区内に特化して東西南北に常設の場があることから、この場を活かして先のビジョンの実現を目指していきたい。			
●団体の社会的役割(ミッション)		・支援する人とされる人の階層を作らず、誰もが等しく必要な時に必要な物資が手に入り、モノの流れだけでなく、「お互い様」の支え合いの気持ちも生まれるようにする仕組みを作ること。 ・気かけあう社会、いつきでも地域大家族のような安心感が得られ、場を通じた新たな関係性が生まれる活動にしていき、この時期の支え合いが人生100もしくは120年時代を生き抜く強い地域社会の最初の入口、基盤としていく道筋を作ること。			
●団体の活動基盤		●人的資源：食材、物資などの安定的供給のための人材。また場の広報のための伝達者。開催時にフォローしてくれる学生ボランティアの継続的な存在。移動困難な家庭にのちのち配ってくれる人材など ●物的資源：現在は区内5拠点で継続できそうだが今後はより身近な場所での開催を考えると廉価に借りられる場所 ●活動資金：開催場所の拡充に伴う物品購入資金と材料費やレクリエーションに必要な備品消耗品費など。コアに関わる担当スタッフへの人件費（広報から申込受付、保険の手続きや当日全体管理、報告などに伴う作業資金） ●情報：昨年度からの継続でひとり親家庭の実態や学童期の現状把握など学校の指導教諭やスクールソーシャルワーカー、相談専門職員などからの適時の情報提供。特別児童扶養手当時での対応窓口からのニーズやひとり親家庭相談支援機関からの相談傾向など			
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)			
●よるによる会：昨年度から開催場所と回数を増やし定期開催を安定化することで新規参加者の増加とともにボランティア、リピーターの割合を増やした。継続参加により参加者が担い手へとゆるやかに移行し、ボランティア主体の開催が定着しつつある。 ●参加者アンケート・意識調査：よるによる会の継続参加によるエンパワメントを測定。ひとり親家庭の物的ニーズを発展させた、シェアねっと等食支援に対する意識調査も実施。また次年度の朝食会試行に向けた全体調査も実施してニーズを測った。 ●食品提供「シェアねっと」：一時ゼロだった物流ボランティアを6名に増やし、受取り体制を確保。提供先も拡大し、フードドライブBOX常設や回収場所増設で寄付食品を確保。シェアねっと利用者数増加に対応した。 ●広報活動：「支援する側、される側の循環」の理念を広めるためボランティアや協力者の呼称を募集、“よるよる応援隊”に決定。地元企業協力で廃材を活用しキーホルダーを制作・配布。専用ホームページを開設し、活動紹介・情報提供・協力者募集を広く発信。広報的フォーラムとして年度報告会・朝食会試行に向けた検討会をハイブリッド開催 ●次年度朝食会に向け他区のおはよう食堂を視察。		●よるによる会 開催数：9回/年⇒15回/年、開催場所：5カ所→6箇所 平均参加者数：39名/月⇒53名/月、リピーター率：38.8%⇒64.5% 参加者のうちひとり親家庭数：2家庭/回⇒5家庭/回 ボランティア主体開催：2拠点、計4回 ●参加者アンケート・意識調査：よるによる会参加者エンパワメントアンケート計5カ所、6回実施のべ60名回答 ひとり親意識調査1回実施。24名回答。 ●食品提供「シェアねっと」 利用世帯：30世帯⇒60世帯/月、利用登録者数：100世帯⇒140世帯 物流ボラ：0⇒6名、フードドライブ回収場所2⇒4カ所、フードバンク等提供先：2⇒3カ所 ●広報活動：専用HP開設。はじめの100か月育ちビジョンとのコラボでボランティア印章（廃材キーホルダー）配布。ボランティア名称応募、決定。よるによる会のぼり作成。フォーラム（活動報告・朝食会試行検討会）のハイブリッド開催。			
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題			
●昨年度より継続的にアンケートを実施し、参加者満足度の把握から継続参加によるエンパワメントを確認できたほか、ひとり親家庭の物的以外のニーズや、朝食会などへのニーズ調査につなげることができた。 ●意識調査を通じ、ひとり親家庭の「よるによる会」での対応や参加への声かけ、物的以外のニーズを具体的に把握できた。 ●参加者主体の会を意識して開催を継続した結果、2拠点でボランティア主体の会が定着しつつある。 ●食事メニューを簡易化し、各事業やボランティアに委ねることで、参加者が手伝いや作業内容を予想しやすくなり、主体的な活動につながった。 ●活動記録の定着により、全体の動きや発展状況を具体的に把握でき、共有することで他の開催にも活かしている。		ひとり親家庭の「よるによる会」参加人数は、相談場所を別室に設けるなど工夫や丁寧な声かけの結果、徐々に増加している。一方、調査では、少人数制や限定開催といった配慮だけでなく、大人数の場に参加すること自体は望ましいが、「気疲れがある」「日程が合わない」といった要因が参加を妨げていることも分かった。 こうしたニーズにどう応えるかが、今後の課題である。また、次年度に向けて検討した朝食会試行については、ひとり親家庭の朝食欠食率が他家庭より高く、長期休暇には約3倍に増加するという外部データを確認した。一般家庭でも長期休みには欠食が増える傾向があり、給食のない時期に食事をいかに実施するかが重要である。さらに、夏季や冬季など外出が困難な時期に孤食に陥りやすい高齢者をどう迎えるかも課題である。加えて、物価高騰によりフードバンクの寄付食品が減少する中、供給先を拡大することは必須の課題である。			
この1年間の活動を通じて		参加者の増加と継続参加による担い手へのゆるやかな移行や変化を生み出しひとり親家庭の情緒的ニーズを把握し食品提供体制を拡充することで、支援の循環による持続可能な基盤の整備		を達成しました。	
■ 受益者の具体的な変化（自由記入）					
この1年間の活動を通じて、参加者が会に継続して参加する中で役割を実感し、担い手へのゆるやかな移行が進んだ。					